

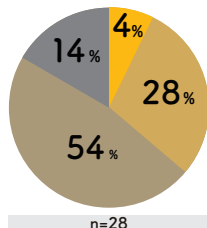
肺高血圧症患者さんアンケートの結果について

調査主体: ヤンセンファーマ株式会社 調査名: 肺高血圧症患者さんの生活や治療に関するアンケート
 調査方法: Microsoft Formsによるオンライン調査(ヤンセンファーマ提供) 調査期間: 2021年3月29日~4月16日
 調査対象: 肺高血圧症患者さん28名(サンプル数僅少のため、参考資料としてオンラインイベント等にて発表)

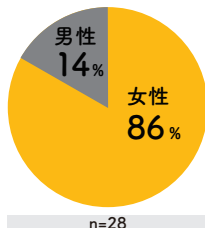
調査対象属性

あなたのご年齢を教えてください

- 20歳未満
- 20-30歳代
- 40-50歳代
- 60歳代以上

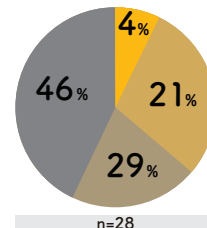


あなたの性別を教えてください



肺高血圧症と診断されてから現在までの期間を教えてください

- 1年未満
- 1年以上5年未満
- 5年以上10年未満
- 10年以上

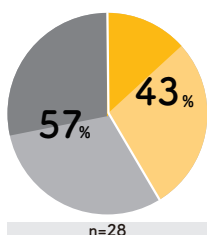


社会生活と周囲の理解

約6割の患者さんが就職することや仕事の継続に問題があると感じています。職場や学校でのサポート・周囲の理解不足もその原因の一つかもしれません。

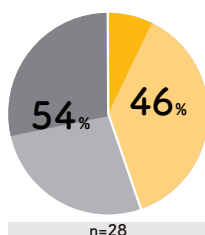
就職することや仕事を続けることは問題ない

- あてはまる
- ややあてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない



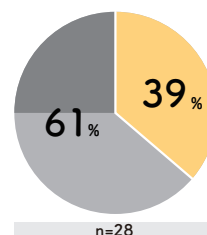
職場や学校など社会生活の場で、サポートしてくれる人がいる

- あてはまる
- ややあてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない



肺高血圧症という病気に対して、周囲の人からの理解はある

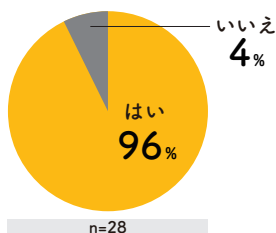
- あてはまる
- ややあてはまる
- あまりあてはまらない
- あてはまらない



6分間歩行検査

約9割の患者さんが6分間歩行検査※1を受けた経験有、約3割程度の患者さんは検査を受けること自体に体力的/精神的負担を感じた経験があるようです。

「6分間歩行検査」を実施したことがありますか？



「6分間歩行検査」に対するお考えや感想として、当てはまるものを全てお選びください(複数選択)

6分間歩行検査は現在の自分の状態を把握できるので大切な検査だと思う



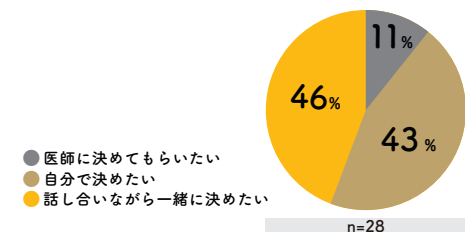
6分間歩行検査は体力的/精神的につらい検査だと思ったことがあった



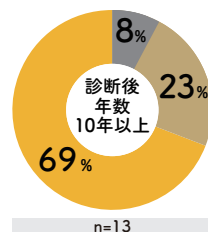
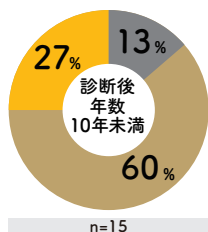
治療意思決定

SDM(医師と患者さんが共に治療決定)※2を意識している患者さんは約5割です。診断後年数が短い人では、SDMを意識している患者さんが約3割です。

治療法の選択・決定について、あなたのお考えや理想に最も近いものは？



診断後年数と、治療法の選択・決定に関する考えや理想の相関



ヤンセンでは、革新的な薬剤の提供に留まらず、患者さんの課題に寄り添う「Beyond medicine(医薬品を越えて)」の姿勢を大切にしています。疾患啓発WebサイトProduce A Hopeを通じて、正しい疾患情報に加え、患者さんの体験談や、患者さんの社会生活・SDMをサポートするための情報を提供していきます。

※1 6分間歩行検査は、PAH(肺動脈性肺高血圧症)や慢性呼吸器疾患、心疾患などの患者さんが受ける検査の一つです。右心カテーテル検査や採血、心エコーなどと共に実施され、6分間歩行検査のみで病気が診断されることはありません。この検査は医師の指示のもと行われます。

※2 Shared Decision Makingの略。日本語で「協働的意思決定」、「患者参加型医療」、「共有意思決定」などと表記され、患者さんと医療者との間の緊張を解き、協働して治療に向き合う関係づくりに役立つ可能性を持つ新たな対話型のコミュニケーションです。SDMでは、医療者は、専門的な知見や経験による「医療の情報」を患者さんと共有します。患者さんは、病気や体調のことだけでなく、患者さんの価値観、希望、社会的な役割や背景などを「患者さんの情報」として医療者と共有します。(中山健夫、薬局、2018; 69: 2217-21。/藤本修平ほか、日本医事新報、2016; 4825: 20-2。)